

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

中国福建省における宗族の再興： 閩南地域の老人会を中心にして

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 潘, 宏立 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002135

中国福建省における宗族の再興 —閩南地域の老人会を中心にして—

潘宏立

キーワード：宗族(lineage) 老人会(association of the aged) 国家(state) 社会(society)
関係(relationships)

1. 容卿村の宗族組織
2. 老人会の組織構成
3. 老人会の関連組織
4. 国家と社会を結ぶ老人会

福建省南部（閩南）農村の宗族組織は、1980年代からの「改革開放」政策の下に、再興の道を辿っている。特に1990年代に入ってから、宗族組織はかなり急速に再興されている。その象徴としては、祠堂の再建や族譜の再編、さらに大かがりの「晋主」儀礼の実施が挙げられる（潘 1999）。それには、老人会と非常に深い関係をもっている。私は1994年から一年余り猪南農村で宗族の再興について現地調査を行い、その老人会組織の社会的な役割に注目してきた。1999年8月、さらに2000年3月と8月、短期的な追跡調査を実施した。本文は、これらの現地調査に基づいて、石獅市容卿村の老人会を例として、その組織の性格や宗族再興への役割、社会的機能を検討する。

1. 容卿村の宗族組織

容卿村は福建省石獅市靈秀鎮に属する行政村の一つであった（図1）。1994年10月、容卿行政村は靈獅、靈山、靈峰などの三つの行政村に分離された。しかし、容卿村は習慣上の呼び名が村名となったもので、現在も一般に使われている。もともと、容卿村は容卿宗

族から由来する。容卿宗族は、蔡姓¹⁾の漢族で、共通の祖先をもっている。彼らの祖先は14世紀中頃の元末に、容卿に移住してきたと伝えられている。それから24世帯を数えるこの蔡姓宗族の人口は8000人を超えており、石獅市近郊にある靈秀山周辺の八つの自然村に集中している²⁾。それらは強房、二房、西坑、赤坑、水坑、山下、仕林、玉楼である。この血縁的村落群は「容卿八郷」とも呼ばれる。「容卿」は、実は一つの大きな宗族集団で、巨大な父系血縁集団の村落群である。

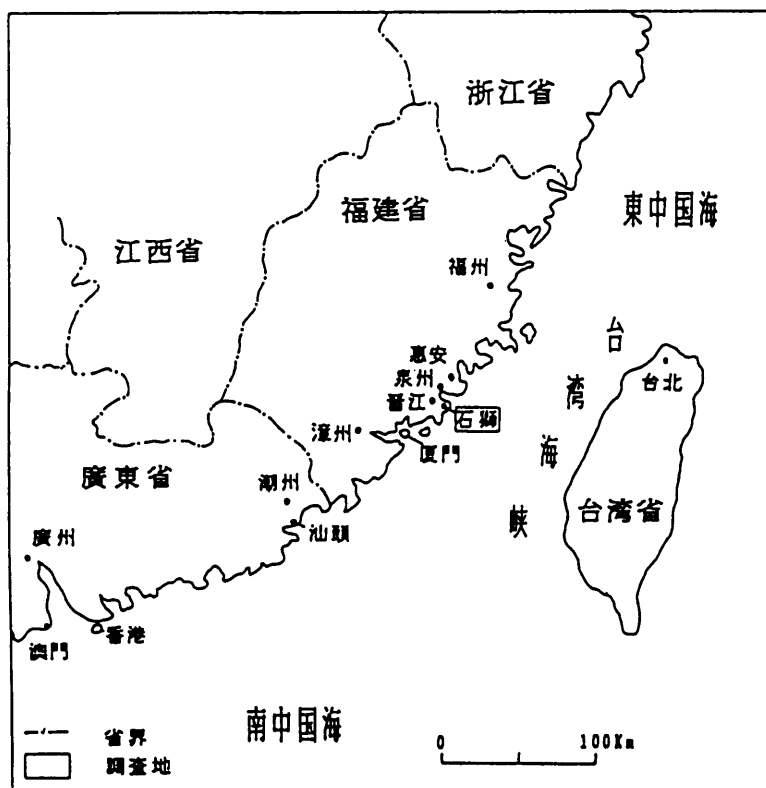


図1 中国東南部

1) 蔡はこの地方において最大の大家で、晋江市と石獅市の全人口の三分の一を超える40万人が182の村落に分布している。そのうち、単姓村が圧倒的な多数を占める。

2) 1997年、人口12000人をもつ石獅市祥芝鎮の蔡氏宗族は、昔、容卿から移住してきたという共通の血縁関係が確認された。祥芝鎮は容卿村から約15キロ離れている沿海部にある。現在、両宗族は密接な連携関係をもつようになった。これ以外に、容卿から台湾、フィリピンをはじめ東南アジアや中国本土の各所に移住した人も1万人を超えられている。

ところが、解放後に設定された容卿行政村は、容卿宗族の六つの自然村、強房村、二房村、西坑村、赤坑村、水坑村、山下村から構成される。仕林村は一つの独立した行政村をなし、玉楼村は別の行政村、塘園村に属する(図2)。現在、行政村容卿は前述したように、すでに三つの行政村に変わった。すなわち、強房村と西坑村の二つの自然村は行政村の靈山村に、二房村と山下村は行政村の靈峰村に、赤坑村と水坑村は行政村の靈山村をそれぞれ構成することになったのである。つまり、一つの宗族集団としての容卿八郷は、五つの行政村に分割されることになったのである。

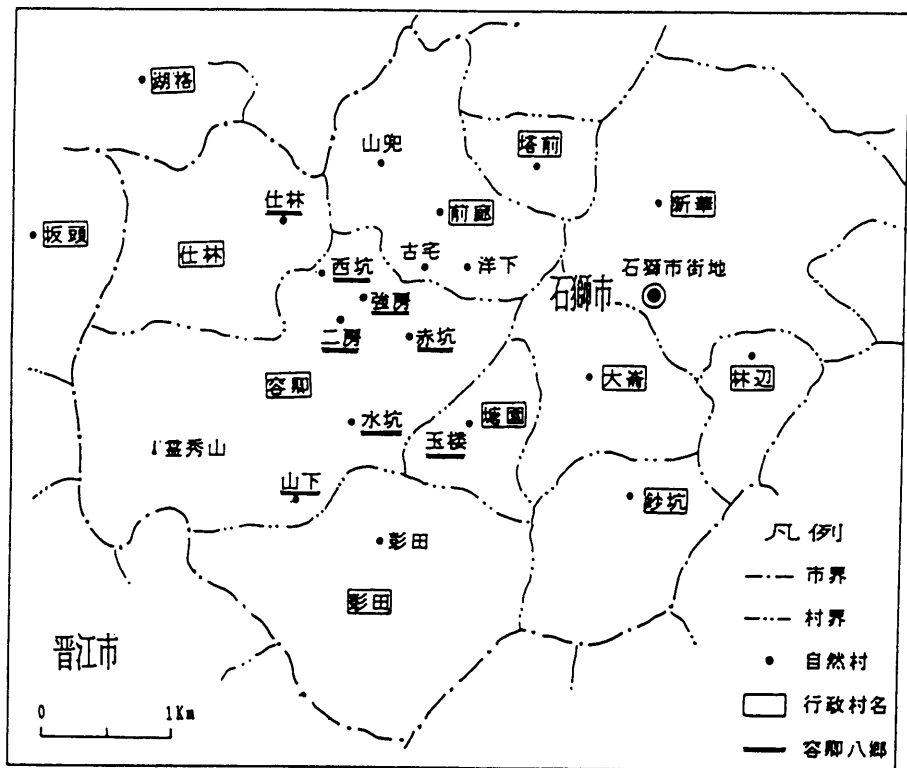


図2 容卿八郷の略図

容卿宗族は、血縁関係によって細かく分節しており、大宗、小宗、房族という各レベルの分節構造をもち、それぞれ祖先祭祀の場をもっている。容卿宗族は「大宗」（大宗族）と呼ばれ、二世祖の三人の息子の子孫はそれぞれ長房、二房、三房といった分節を構成し、「小宗」（小宗族）と呼ばれる。各小宗の下位において、さらに幾つかの基層的分節である「房」がある。また、大宗のレベルでは、容卿宗族全体の始祖を奉る家廟をもち、三つの小宗はそれぞれ各自の先祖の位牌を奉る祠堂を設ける。それぞれの房族も祖先祭祀の場である「祖厝」をもっている。祖厝では、主に、まだ「晋主」儀礼を経していない房族成員の位牌を供養するのである。遅くとも200年前から、このような三つのレベルの祖先祭祀の空間が存在している（潘 1997）。こうした大宗族の各分節にきちんと対応する祖先祭祀の場の構造は、典型的な形態であると言える。

容卿宗族の組織は祖先祭祀を通じて統合された。大宗族レベルでの祖先祭祀は家廟で行う年二回の「春冬二祭」と清明節の始祖の墓参である。これに対して、小宗レベルでの祭祀は年一回の「祭冬」と清明節頃の墓参がある。房レベルでは祖先祭祀が最も頻繁で、年八回も行われる³⁾。これらの祖先祭祀がそれぞれの集団の関係を密接にし、さらにそれが宗族レベルでの祖先祭祀によって、実際上も観念面でも統合される。このような発達した宗族の祭祀空間は、この地方では、ほかの多くの大宗族村落にも見ることができる（図3）。

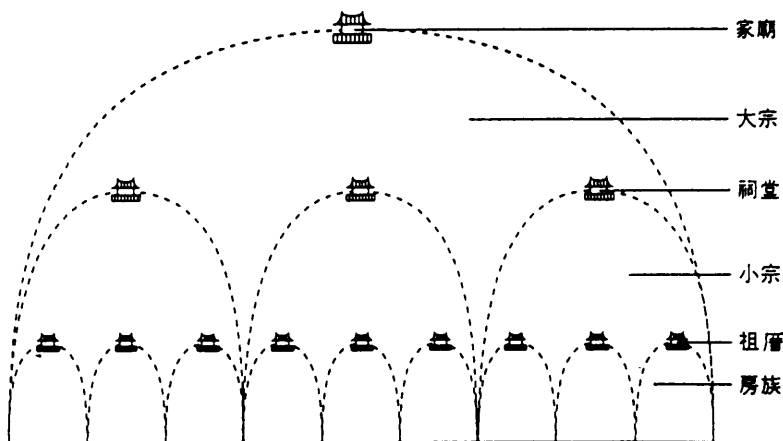


図3 容卿宗族概念図

³⁾ その時期は民間の「八大節」、つまり正月初二（新年）、元宵（上元）、清明、端午、中元、中秋、冬至、「年兜」（大晦日）に対応する。

解放前、容卿宗族には族長、長老会などのリーダーが存在し、宗族集団を統括していた。当時、宗族の子弟を養成する私塾である「学堂」は家廟の中に設立されていた。この「学堂」を管理・運営する組織は「容卿学堂董事会」と呼ばれ、事実上の宗族長老会であった。また、当「董事会長」は容卿宗族の人々に族長と見なされ、族長の役割を果たしてきた。容卿宗族には、共有する土地財産や族譜をもっていた。

解放後、政府は宗族組織を封建社会の産物として否定し、それを存続する社会経済的基盤を打ち砕いて、村落にまで強力な行政組織をつくりあげて、農村社会に絶大な勢力を誇る伝統的宗族の権力を剥奪してきた。さらに、激しい政治運動を繰り返して、宗族を徹底的な消滅を図った。このため、容卿宗族も1950年から1980年代までに衰弱の途をたどりつづけた。1950年代から、大宗、小宗レベルでの祖先祭祀は中止となり、位牌や族譜が燃やされ、建物は倉庫や医療室として使われたので、祖先祭祀の機能を失った。それと同時に、房族レベルの祖先祭祀もおおやけに行われなくなった。「祖厝」は老朽化が進み、倒壊したのも少なくなかったのである。このため、容卿宗族はしだいに弱体化していった。

1980年代に入ってから、中国の政治・経済環境が大きく変わり、容卿宗族が急速に再興しており、その過程は1990年代中期までにほぼ完了したと言える。容卿宗族の再興は、各分節の祭祀空間の再建をはじめ、祖先祭祀の再開、族譜の再編、宗族財産の再蓄積、またはこれに基づいた血縁関係の再重視と系譜関係の再強化、宗族組織の再確立、さらに村落社会における宗族的機能の回復などが見られる。現在、宗族活動がすでに固定化し、宗族組織が村民の社会生活へ深く関与をし、宗族の現代社会への復帰はしっかりと定着している。では、容卿宗族の再興において老人会はどのような社会的な役割を果たしたか、また、その組織自体はどのような性格をもつようになったか、さらに、現在において老人会はどのような社会的機能をもっているのかを検討していく。

2. 老人会の組織構成

1980年代から、中国の各地では老人たちが「老年協会」（老人会と略称されることが多い）を組織してきた。また、中央から地方の市、県、さらに郷、鎮までの各レベルの政府は「老齡工作委员会」（老齡委と略称される）を設立し、老人会の指導を含む老人問題に全般的に対処している。閩南農村では、老人会は政府の奨励の下で、急速に発展してきた。今では、90%以上の行政村と町に老人会が設立されている。容卿村では、老人会が1986

年に成立した。

老人会に加入する条件は年齢であり、村落によって多少の差があるが、一般的に 55 才か 60 才になると、老人会に申し込みを行い、ほぼ 100% 加入できる。容卿村では、年齢 55 才以上の村民なら、老人会に入会を申請し、2.4 元（約 36 円）の年会費を払えば、だれでも入会できる。1995 年の時点で、その会員数は 400 人余りであった。1999 年現在、靈獅村では 60 才以上の老人 200 人余りが老人会に加入している。それは村の老人人口の 80% を占める。

現在の中国政治のシステムにおいて、各地の老人会は「村党支部と村委会の指導の下に置かれる老人の群衆性（民衆的）組織」として政府から規定されている⁴⁾。各老人会の会則にはほとんど例外なくこの規定を明記している。1996 年 4 月に改定した「石獅市靈秀鎮容卿老人總會章程（会則）」の第一章総則の第二条にも同様の規定がある⁵⁾。国家行政の指導を受けながら、国家行政に入っていない老人会は、その組織構成や運営などに対して、村行政（共産党委員会と村民委員会）などの政府側から直接的な関与が見られない。

容卿老人会の組織はその理事会によって動かす。理事会はその成員が村行政から指名されて作られたわけではなく、全く各「角落」（房族）の有能な老人たちの推挙によって作られたのである。こうした選出方法は国家行政力からの直接的な介入がほとんど見当たらない。実際には、選出された理事会の成員たちはほとんど伝統的な勢力基盤としての容卿宗族の有力者たちである。容卿老人会の理事会は二年一度に改選が行われている。

容卿老人会の運営費については村行政からの補助は一切なく、自分たちでまかなう。主な資金源は華僑と村民からの寄付、および老人会の経済活動からの収入である。容卿老人会では、華僑が「恵老店」とよばれる 8 軒の舗を老人会に寄付した。老人会はそれを村人に貸出し、賃貸料を徴収する。そのほか、老人会が管理する自由市場、会員の娯楽用のマージャン卓、葬式用品の使用料、さらに村廟の管理費などの収入を得る。

この数年間の追跡調査から、容卿老人会の組織機構は村落社会の変化に適応して、自己調整を行いながら、さらに充実していく様子が見られる。1994 年から 2000 年までの 6 年

4) 例えば、泉州市老齡工作委員會は中央政府の政策によって制定した「泉州市村（居）老年人協會章程」第一章総則に明記されている。

5) 「石獅市靈秀鎮容卿老人總會章程」の第一章総則の第二条に、「本会の性質としては、靈秀鎮兩委（共産党と政府）および容卿党総支（共産党総支部）により直接指導下に置かれる群衆性（民衆的）老年人の組織」と明記している。「容卿老人總會章程」が第一章の総則、第二章の任務、第三章の会員、第四章の組織、第五章の附則、計 20 条から構成する。

間、容卿老人会の理事会が四回の改選を行ったが、その組織機構の調整、充実が顕著である。容卿老人会の組織機構およびその変化から、当老人会の性格を窺える。1994年に改選した「石獅市容卿老年協会第五期組織機構」は次のようである。

容卿老人会の組織機構（第五期）

永遠名誉会長（3名）、永遠名誉顧問（9名）、顧問（8名）、
会長（1名）、常務副会長（2名）、
副会長（環境衛生担当1名、財務担当1名、調停担当1名、文教担当1名、連絡担当1名）
秘書長（1名）、文化センター主任（1名）、文教組（正組長、副組長各1名）、
財務組（正組長、副組長、会計、出納各1名）、調停組（正組長1名、副組長2名）、
理事（12名）、喪具管理員（3名）
仕林分会（会長1名）、強房小組（組長1名）、二房小組（組長1名）、西坑小組（組長1名）

容卿老人会の組織機構から老人会と行政村との範囲を見ると、それは単一行政村を超える多くの行政村を含む老人組織であり、その組織と成員の構成範囲は容卿宗族の関連村落に及んでいる。当時、容卿老人会の組織では、同じ容卿行政村の強房村、二房村、西坑村の老人会を「小組」というのに対して、「容卿八郷」に属する別の行政村である仕林村の老人会は「分会」と名付けられている。また、同じ「容卿八郷」に属する玉楼村は、行政上では塘園村の一部として存在しているにもかかわらず、わざわざ玉楼村出身の塘園村老人会副会長の一人を容卿老人会の副会長（連絡担当）のポストを与えている。

1996年5月、容卿老人会は理事会の改選を行った際に、容卿行政村が三つの行政村に分立した現実に対応して、三つの行政村に置かれる老人会を内包する「容卿老人総会」に名称を変更した。また、老人会の会則も改訂しており、新しい「石獅市靈秀鎮容卿老人総会章程（会則）」の第三章会員則の第十条に、「本会は団体会員制を実施し、容卿所属の各村の老人会または小組が本会の団体会員として本会に加入することができる」と記している。こうして事実上、容卿行政村分村前の容卿老人会をそのまま維持してきた。このようにして、容卿老人総会は「容卿八郷」に属する五つの行政村の老人会を、それぞれ下位の組織として内包することになった。その後の1998年と2000年の二回改選にもこの構造を保っている。

前述のように、もともと老人会は行政村「両委」（共産党と村民委員会）からの指導を受けるべきもので、行政村ごとにその組織をつくることが決められている。しかし、容卿老人会とその後に変わった容卿老人総会は、いずれも容卿宗族を主体として構成されたのである。これによって、もともと容卿老人会が宗族との関係の深さは明らかである。

容卿老人総会理事会は主に下位の各老人会から推挙された有能者から構成されている。理事の任期は二年で、再選されることが多い。また、定年退職した地方政府の幹部や知識人、地方の名士を理事会に入会させる⁶⁾。したがって、これらの理事は容卿宗族のすべてのエリートである。例えば、村の行政の元責任者、定年退職の高校教員、「農民企業家」、風水師、民間信仰に詳しい人、帰国華僑などを含める。さらに海外在住の華僑有力者にも名誉役職が与えられる。このため、老人会は村落の各階層、各集団の利益代表となっている。この数年間、理事会の役員数は改選ごとに増えてきた。すなわち、1994年には58人（兼任を含む、以下同）から、1996年には76人に、1998年には132人に、2000年には138人まで急増してきた。これを見ると、内外の容卿宗族の有能者を幅広く取り込んでいることがわかる。1998年3月、理事会の中に、常務理事会がおかれた。理事会が半年ごとに会議を開くのに対して、常務理事会は毎月会合（必要に応じて増加可）を開き、村落や宗族内外の諸事務を討議している。

理事会の役員数の増加と共に、その組織機構はさらに細分化され、事務的部門が大幅増設された。1994年には五つの組であったのが、1996年には「秘書組」、「財務組」、「教育組」、「文史管理組」、「公益建設組」、「聯落組」、「文体宣伝組」、「移風易俗調解組」などの8組に、1998年には「秘書組」、「財務組」、「宗教民俗事務組」、「宗族事務組」、「公益建設組」、「民事調解組」、「生活福利保健組」、「中青年聯誼組」、「婦女聯絡組」、「関心下一代協会」、「容卿老年学校」、「文体活動中心」などの12組に増加し、さらに2000年には「秘書組」、「財務組」、「宗教民俗事務組」、「宗族民俗事務組」、「公益建設組」、「民事調解組」、「生活福利組」、「中青年聯誼組」、「家廟管理組」、「市場管理組」、「婦女聯絡組」、「文体活動中心」、「財産管理組」、「容卿老年学校」、「関心下一代協会」、「金相院（容卿宗族に属する寺院）管理組」などの16組から構成された。こうした事務的部門の増設は、農村社会における諸問題にさらに有効に対処するために行われたのである。この数年間の変化から見ると、老人会が単に村人の老後生活のさまざまなサービスの機能をもつだけでなく、ますます村落の安定と発展にも関与していることが明らかである。また、老人会が宗族と

⁶⁾ 「石獅市靈秀鎮容卿老人総会章程」の第四章組織則にも明記している。

深い関係をもちながら、現在の農村社会から現れてきた「現代機能」をもつ民衆的な組織となっている。しかし、決して伝統的な宗族組織と同一ではない。

3. 老人会の関連組織

政府が農村社会の老人会を重視している原因は、政府の政策を擁護し、社会発展と安定に貢献することが期待されているからである。それゆえ、各老人会の「条例」（会則）は必ず老人会が「村共産党支部と村民委員会の指導の下に」置かれ、「共産党を擁護し、社会主義を熱愛する」、「共産党の方針、政策を宣伝する」などの内容を明記している。したがって、老人会は村行政を構成する「村両委」（行政村の共産党委員会と村民委員会）に直接には所属しない「群衆組織」でありながら、「村両委」の指導下にある、村行政に協力的な組織という建て前の規定がある⁷⁾。

古くから宗族が発達し、儒教の影響が根強く存在している閩南農村では、老人は大きな影響力をもっており、つねに伝統的権力の中心的な存在でもある。1980年代からの「改革開放」における社会政治・経済の急変とともに、宗族の再興は閩南農村社会にとっては必須のものとなった⁸⁾。容卿老人会の役員は、ほとんど宗族の実力者によって構成されている。老人会への影響力は支配的なものである。老人会は、こうした国家と社会との両方につながるという有利な立場を生かして、政府にまだ公式に認められていない宗族の再興を促進する最も重要な役割を担ってきた。事実上、容卿老人会は、それ自身の発展とともに、宗族長老会の母体になりつつあり、宗族の再興を促進してきた。容卿老人会はまず、準宗族的組織から宗族的組織に関連組織を次々に作り上げ、それ自身も一步一步宗族組織と深

⁷⁾ 1998年、泉州市老齡工作委员会は「泉州市村（居）老年人協會章程」を所属の市や県の各老人会に配り、老人会の会則を統一しようとした。その中の「総則」に、「老人会は村党支部と村委会の指導の下に置かれる。党と政府が老人たちを団結し、結び付く絆と掛け橋であり、社会安定と精神文明・物質文明の建設にとっては重要なパワーである。」と明記している。これは政府が老人会に対するコントロールをさらに強化しようとする思惑が読み取れる。

⁸⁾ 閩南における宗族再興の社会的な要因には、主に以下のような点があると考えられる。第一は、国家政策の変更や社会政治環境の変化によって、宗族の再興に重要な条件がととのったことである。第二は、閩南において、海外華人社会との交流が盛んになり、海外華人からの多額の経済支援と、華人社会に保持されてきた伝統文化の「逆輸入」があったのである。第三に、政治・経済体制の転換期にある現在、宗族組織の再興は社会的にも必要になっている点を指摘できる。例えば、村落の行政組織が村落社会を統制するには、伝統的宗族組織の協力が必要である。第四は、閩南農村社会において、民間信仰の復活や伝統的風習の復興など、伝統文化への「回帰」という文化的雰囲気が生まれた。第五は、閩南農村での宗族のいち早い再興は、閩南における宗族の発達の歴史と深くかかわっていること、などが挙げられる。

く関わってきた。

1988年、老人会は政府の「社会辨学」という呼びかけに応じて「容卿学校董事会」を設立した。これは主に容卿小学校への資金援助のために結成される村民組織であり、華僑や村民からの寄付金をもとにした教育基金を運営・管理する。董事会は容卿小学校の教員と学生にそれぞれ「奨教金」、「奨学金」を贈り、学校教育を監督し、校長の人選を決定するほど権力をもっている。当董事会の指導部のメンバーはほとんど老人会の理事である。1950年代までに存在していた「容卿学校董事会」は容卿宗族の長老会にあたる宗族組織であった。当董事会の設立と運営は、村民に宗族意識を高揚してきた。董事会は学校教育への実績があるので、老人会の社会的地位を高めた。それと同時に、宗族組織の役割もある程度果たした。この点で、「容卿学校董事会」は準宗族的組織と言えるのではないだろうか。

1990年代前半まで、老人会の直接的な関与の下に、容卿宗族の大宗や小宗では祠堂や家廟の「再建委員会」と祠堂や家廟の「管理委員会」などの宗族組織が設立された。三房小宗の祠堂は1993年11月に、二房小宗の祠堂は1994年9月にそれぞれに落成したが、それらの再建前には「祠堂再建委員会」が、再建後には「祠堂管理委員会」が老人会の指導の下に設立された。1994年8月、「容卿蔡氏家廟再建董事会、監事会」を結成した。1996年1月、家廟落成後、この組織は「容卿蔡氏家廟管理委員会」に変わった。これら組織のメンバーの大半は老人会の役員やその経験者で構成され、祠堂と家廟の再建や管理を通じて宗族組織の運営にもあたってきた。こうした祠堂や家廟の再建と管理委員会は実質上宗族長老会として機能し、村落社会をコントロールする一大勢力となっている。また、老人会の会長は宗族の再興や運営をめぐる多くの事務に、直接的かつ全面的に関与してきたので、事実上の族長として村人に認められている。

このように容卿宗族再興のプロセスを見ていくと、容卿宗族は老人会の関与の下に、祖厝、小宗祠堂、家廟の再建を通して、宗族の財産の再蓄積、族譜の再編、祖先祭祀の再開、血縁関係の再重視と系譜関係の再強化、宗族組織の再確立、宗族成員としての権利と義務の再確認、さらに村落社会における宗族的機能の回復などをはかり、次第に再興を促してきたと言える。特に1990年代後半から、老人会の内部で、幾つかの下位組織が設立されたことは注目に値することであった。例えば、容卿老年学校や「関心下一代協会」（若い世代の育ちへの協力的な組織）や「文体活動中心」（娯楽・体育センター）などが挙げられる。これについて、「石獅市靈秀鎮容卿老人総会章程」の第一章総則の第二条に、「本会は老人会、老人体育協会、関心下一代協会といった三位一体の体制を実行する」と明記している。

実際の組織と運営の状況を見ると、「総会章程」に書かれた新設組織はやはり老人会の下位組織に過ぎない。しかし、老人会が重視されることはいうまでもない。1996年11月、容卿老人総会はさらに「容卿老年学校」を設立した。旧暦の毎月二、十六日に理事会の役員や老人たちに保健知識や現代科学や政治を教える。教員は地元の定年教師または石獅市の現役教師である。それと同時に、毎週の火、木、土曜日の午後、「三国誌」などの物語を講演する。このように充実した活動があるので、1999年8月、「容卿老年学校」は泉州地区老年学校経験交流会で表彰を受けた。これらの新しい組織の設立は、最初は政府の呼びかけによって行われたが、その後、地域社会に有益であったために発展してきたのである。また、「容卿駐石獅青年聯誼会」という石獅市在住の容卿宗族若者の組織も老年総会により指導され設立された。それは石獅市内在住の容卿青年の団結および海外在住の容卿籍の若い華僑と交流するために、自発的に結成された青年組織である。これらの関連組織の設立により、老人会は国家との関係、宗族との関係をさらに強化してきた。そして、老人会の存在基盤がいっそう強固になり、その影響力もますます強くなってきたのである。

老人会の役員はこうした関連組織の要職を兼任するので、彼らは二重の身分をもち、都合によって、二つの身分を使い分けることができる。たとえば、政府と関わる事柄に対して、老人会の名義を使って対応する。逆に、宗族関係の事柄に関わる場合には、宗族組織の名義を使って処理するのである。また、老人会は各関連組織を作って、宗族の再興を促進してきたが、同時にこれらの関連組織も老人会を強力にバックアップしており、老人会の勢力を大幅に強化してきたように考えられる。老人会は宗族組織を中心とする関連組織とのあいだ、こうした互いに促進しあう相互作用がよく見られる。これと反対の例を見ると、恵安県小乍郷新橋村は陳姓の単姓村でありながら、宗族組織が十分に復興していない。そのために老人会は強力な組織とならず、老人会の村落社会への影響力も限られているのである。すなわち、両者の相互作用は農村社会にとって大きな役割をもっていると考えられる。

4. 国家と社会を結ぶ老人会

容卿村老人会の「活動室」（娯楽室）では他の老人会と同じように、マージャンをしたり、世間話をしたりする老人たちの姿が毎日見られる。表面的には、老人会は村人の楽しい老後生活のために設置されたものと思われるが、実際には現在の農村社会において、老

老人会は大きな社会的な役割を果たしている。国家と社会との関係という視点から見ると、老人会は両者の掛け橋と仲介役となっており、農村社会の安定と発展に不可欠な存在になっている。

国家と社会を連結する老人会の概念図

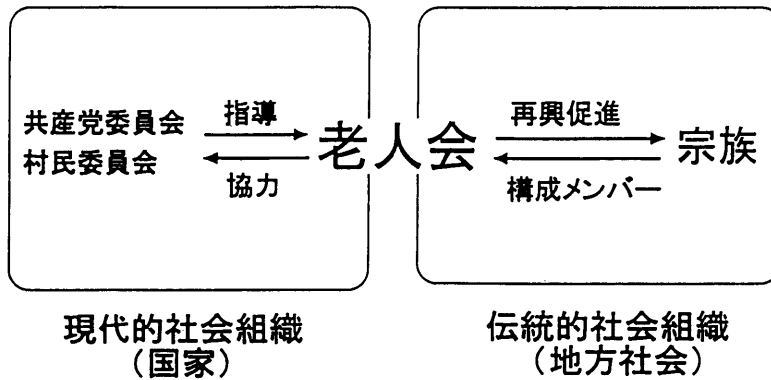


図4 国家と社会を連結する老人会の概念図

上に示したのは、国家と社会を結ぶ老人会の関係の概念図である（図4）。この図から国家と社会とのあいだで果たす老人会の役割を見てみたい。現代的社会組織である「村両委」を国家として、伝統的社會組織である宗族を地方社会として設定すると、老人会は両者の中間にある。なぜなら、老人会は両者と共に密接な関係を保っているからである。一方で老人会は「村両委」の指導を受け、老人会が「村両委」に協力するという関係がある。他方で、老人会は宗族の再興を促進してきた。また、老人会の役員は宗族の長老によって構成されているという関係がある。それと同時に、老人会は国家の範疇に完全に入ることもないし、完全な宗族的な組織とも言えない。このような視点から見ると、老人会は現代の国家行政と村落社会における宗族などの伝統勢力の接点に位置していることが明らかである。特に、現時点で、国家は宗族を公式に認めるに至っていないので、両者の間は直接に連結していない。しかし、宗族組織はすでに復興しており、村落社会に大きな影響力を持ち、社会的な役割も果たしている。この場合は、宗族からの協力を得られないなら、村落社会をコントロールすることはかなり難しい。したがって、「村両委」は老人会を通して村落社会をコントロールしようとした。一方、宗族も老人会を通して「村両委」にいろいろ

な影響を与えて、宗族集団の利益を守っているのである。

老人会は国家の支持を得て、国家から権威の授与を受けたのである。それと同時に、社会の伝統勢力の支持をも得て、社会基盤を固めている。老人会はこうした独特な立場を生かして、村落社会において大きな社会的な役割を果たしており、それ自身の社会地位を高めて、地方社会におけるもう一つの権力の中心となりつつあるように思われる。老人会が仲介役としてよく機能しているので、国家と社会が円滑に連結しているように見える。容卿の場合、老人会のおかげで、「村両委」と宗族との間に、相互協力、相互補完的な関係を構築してきたように考えられる。

さらに老人会の社会的位置の分析から、老人会はいつも国家と社会との中間に位置し、固定されてきたというのではない。この10数年間の老人会の動きを見ると、老人会は伝統的社会組織の方に傾き、宗族との関係がますます深くなっていることが分かる。このため、「泉州市村（居）老年人協会章程」のような国家側が統一した老人会の会則⁹⁾を公表し、各市、県の老人会に配り、各老人会の会則を統一しようとしたり、時事政治の教育を含む老人学校開設を呼びかけたりして、老人会への指導をさらに強化しようとする動きも顕著になっている。また、老人会の経験交流会の開催や模範老人会への奨励なども一側面から老人会をコントロールする思惑もあるのである。特に1999年7月、「法輪功」事件発生後、多くの老人が「邪教」組織に巻き込まれた事実が明らかになれば、老人問題の重要性がいつそう強く認識され、政府は老人会に対する関与をさらに強化しようとする動きがあるようである。例えば、2000年8月、石獅市老齡委は講師団を各村落の老人会に派遣し、老人たちに「三つの代表」の理論¹⁰⁾を説明していた。ある講師は、老人たちが「三つの代表」理論を理解したうえで、共産党幹部を監督することができると村民に力説した。それにもかかわらず、現時点で、老人会はほぼ国家と社会との中間に位置している。それゆえ、老人会は大きな社会的な役割を果たすことができると思われる。

1994年から2000年までの老人総会役員数の急増と事務的部門の大幅増設について前述したように、村落社会において老人会の社会的な役割がますます大きくなってきた。容卿

⁹⁾ 「泉州市村（居）老年人協会章程」が第一章の総則、第二章の任務、第三章の会員、第四章の組織原則と機構、第五章の協会経費、第六章の会員紀律、第七章の附則、計17条の内容から構成する。この会則は国家の立場から老人会組織の性質などを詳細に規定している。

¹⁰⁾ 2000年初、江沢民総書記が21世紀における中国共産党を建設する理論として提出したものである。つまり、中国共産党が絶えず中国の先進的な社会生産力の発展要求を代表し、中国の先進的な文化の発展方向を代表し、中国の最も広大な人民の根本的な利益を代表するものであるという意味である。

老人総会に属する霊獅村老人会の活動を観察すれば、その社会的な役割は主に次の二つに分けることができる。

第一に、彼らが村行政への積極的な協力が顕著である。「村両委」の会議に老人会長が参加し、「拡幹会」（一般幹部が参加する会議）には老人会の役員も参加することは一般的になっている。「議村政当参謀」といったように村行政のアドバイザーとして村政に関与している。例えば、老人会は30万元（約450万円）の募金を集めて、「合作医療所」（村落診療室）をつくった。また、村幹部と一緒に村民に「合作医療所」を加入するよう説得・動員して、村民の半数を参加させた。1998年5月、村民委員会ビルをつくるため、老人会の役員は華僑とのパイプを生かして、村幹部と海外に同行し、容卿華僑から65万元（約975万円）の建設費を集めてきた。また、村の道路や公衆便所の建設、環境衛生の管理、葬儀の改革（土葬から火葬への変更と葬儀の簡略化）、計画出産の実施などにも中心的な役割を果たした。

第二に、村落内外の紛争を調停し、村落社会の安定と団結を維持するには、老人会の役割が最も大きいである。この数年間、霊獅村老人会は数十件の民事紛争の調停に成功した。なかでも、関係者が数カ国に居住しているため、半世紀にもわたって解決が難航し、暴力衝突も頻発していたある大家族の財産紛争を解決した例もある。さらに、死者の賠償をめぐる難航し、大村落同士の械闘へ発展する恐れがあった交通事故を早期にかつ平和に解決した例もある。また、「扶孤基金」（孤児への扶養基金）を設立し、孤児を援助している。新年と老人節の際に、貧しい老人に補助費や食料の支援も行っている。2000年夏休みに、家廟内で「老少同樂園」（老人と小学生との交流施設）をもつくり、老人と少年は共に週一回卓球などのスポーツを楽しんだ。老人会は老人の観光旅行を年二、三回主催したり、異なる楽団を二つ組織したりして、村落の老人の生活を豊富にする。このようにして、老人会は村落の「老政府」と呼ばれるように村民に信頼されている。

本文に提示した容卿老人会は閩南農村における一例であるが、閩南農村における老人会の特徴を現している。本研究は容卿老人会が果たす役割を、国家と社会との関係という視点から分析し、老人会が現代の国家行政と村落社会における宗族などの伝統勢力の接点にあり、両者との深い関係を保ちながら、宗族の再興に最も重要な社会的役割を果たしていることを明らかにしてきた。また、中国社会において、老人会のような国家と社会の間に介在する、しかも両者の掛け橋の役割を果たしている「群衆組織」は、数多く存在している。これらの組織の存在は中国の社会維持の重要な特徴となり、これらの組織は中国社

会の安定には不可欠なものと言える。これについて今後更なる研究が必要と思われる。

参考文献

潘宏立

1997『東南中国の漢族社会組織とその変容—閩南農村社会における宗族の研究』（総合研究大学院大学博士論文）。

1999 「宗族再興の象徴的儀礼—現在の閩南農村社会における『晋主』儀礼を中心に
して」、『中国 21』6、愛知大学現代中国学会、77-108 頁。



家廟内に設置された「容脚老年總會本部」



定期的に開かれる老人会理事の会合



民事紛争の調停で村民からもらった感謝の旗



容郷の守護神「上帝公」の祭祀について議論している老人会の責任者たち



宗族の長老でもある老人会の役員たち



「三つの代表」の理論についての勉強会

